

地域景観資源 （第5回登録）

登録名称	景観特性
こま参道  	千代見橋から元滝まで続く階段の参道は、大山の門前町として江戸時代から参拝客で賑わいました。 今でも当時の面影を残す参道は、かつて「こま」などの玩具や「お盆」などの生活雑器などを作っていた木地師たちの店が数多く軒を並べていたことから、このように名付けられました。 こま参道では、土産物屋のほか、木地師による「こま」づくりを見ることができます。また、名物のとうふ料理を味わうこともできます。 沿道は、先導師旅館（宿坊）が軒を連ね、講名や人名の刻まれた玉垣や石垣などが印象的なまちなみとなっています。 参道は、総数 362 段の階段と、27 の踊り場からなります。踊り場には「こま」をデザインしたタイルが貼ってあり、階段を上がって次の踊り場へ行くと「こま」の数が 1 つずつ増えていく遊び心も見られます。
とうふ坂  	とうふ坂は、良弁滝バス停付近からこま参道の下、鈴川に架かる千代見橋までの約 300 メートルの旧参道です。 江戸時代には、参詣者たちが手の上に乘せた豆腐をすり、喉の渇きを潤しながらこの坂道を上ったと伝えられてることから、この名がついたとされています。 沿道には、講名や人名の刻まれた玉垣や石垣、大山講の人たちが寄進した登拝記念の石碑などがある先導師旅館（宿坊）が軒を連ねています。こうしたまちなみは、粋な江戸文化や気質とともに、江戸時代に隆盛を誇った大山詣りの風情や江戸情緒を感じさせる印象的なものとなっています。 また、沿道の中腹には、軒下に掲げられた今では数少ない「大山講の板まねき」を見ることができます。

良弁滝と 開山堂	 	開山堂は、大山寺開山の祖、奈良・東大寺の初代別当、良弁僧正を祀るお堂です。 鈴川のほとりに建ち、堂内には 43 歳と伝わる良弁像と猿が金鷲童子（こんじゅどうじ）を抱いた像が安置されています。その横にあるのが良弁滝です。 良弁滝は、良弁僧正が禊（みそぎ）をしたとされる滝です。 江戸時代、大山詣りの人々は、登拝前に滝に打たれ禊ぎを行い、心身を浄め行衣を纏い、山頂の石尊大権現を目指しました。 今でも、二重滝（にじゅうだき）や、水垢離の名残を感じさせる元滝（もとだき）、良弁滝（ろうべんだき）、愛宕滝（あたごだき）、大滝（おおだき）などが現存しています。 どれも、かつては大勢の人が一度に入れるほど、大きなものであったといわれています。 これらの滝は、江戸時代の浮世絵にもたびたび登場するもので、中でも良弁滝は、北斎、広重、国芳などにより数多く描かれています。
大山火祭 薪能と 能楽殿	 	火祭薪能のものは、大山の各家々が役割を分担し、守り伝えられてきた伝統「大山能」です。 現在は、火祭薪能として、毎年、大山の秋が深まる 10 月初めに、阿夫利神社社務局境内地に建つ能楽殿で開催されており、市の重要無形文化財にも指定されています。 パチパチと薪のはぜる音が静かに聞こえる中、「能」や「狂言」が演じられ、かがり火に照らされた能舞台は、大山の大自然を背景に幻想的に浮かび上がり、見る人たちは幽玄な世界に誘われていきます。 能楽殿は、加寿美橋から愛宕橋に至る旧参道の中腹に位置しています。旧参道の沿道には、玉垣、石碑、獅子山や冠木門などを残す先導師旅館（宿坊）が建ち、大山ならではのまちなみとなっています。

大山阿夫利神社秋季例大祭		明治時代から続く大山阿夫利神社秋季例大祭は、夏山期間（7月27日～8月17日）が無事に終わったことを、氏子たちが神様に感謝する祭りで、大山六町（坂本・稲荷・開山・福永・別所・新町）を挙げて行われます。 毎年、8月27日に、氏子や崇敬者たちによる大山阿夫利神社下社から旧参道にある社務局までの神輿渡御（お下り）に始まり、神様が下社に戻る神輿渡御（お上り）で終わります。 この間、神様が鎮座する社務局では、神楽舞や能・狂言、大山六町による御輿の担ぎ出しなどにより神様をもてなします。 中でも、大行列をなす、お下り・お上りの神輿渡御は、地域の歴史・文化を彷彿とさせるものとなっています。
大山新道 のおかめ 桜の並木 道		早春の大山。大山新道の約300メートルに渡り、およそ160本のおかめ桜が花を咲かせ、沿道を彩ります。 例年3月上旬に開花するこのおかめ桜は、地元の地域振興団体の皆さんが中心となり、毎年植栽が行われてきたもので、長年の取組を経て、大山地区を代表する景観となりました。 おかめ桜の並木道には、伊勢原観光道灌祭りで、姉妹都市である長野県茅野市の大祭「御柱里曳き行」を再現したときに使用した2本の御柱や、かつて田村通り大山道の一の鳥居の近く（現在の藤沢市の国道1号線四ツ谷交差点付近）にあった、大山道の道標などもあります。